

能動的な学びの獲得

—学び・思考の深化を目指して—

1 テーマ設定の理由

今年度は、「国語」という教科の垣根を超えて、これからの社会を生きていくための基盤となる様々な力の育成を目指して授業実践を行っている。昨年度同様、教師が一斉に教材の内容を解説していく授業ではなく、「考える」ことの楽しさとともに、生徒一人ひとりが学び・思考の深化を自分自身で実感することができるような個人での活動を適宜取り入れた。その結果、これまで受動的な学び、学習姿勢しか持ち得ていなかった生徒たちが、以前よりも生き生きとした態度で授業に取り組む姿勢が見られた。これを踏まえ、今年度はより「能動的な学びの獲得」を目指して、生徒が「考える楽しさ」を実感できるとともに、授業で学んだ知識や考え方などを実生活に生かしていくことができる力の育成にも力を入れていきたい。特にペアワークやグループワークなど学習者同士で学びあう環境を積極的に設け、またパワーポイントなどを用いたICT機器を活用した授業の実践も行っていく。

2 実践内容

今年度の実践内容を、「能動的な学びの獲得」とともに昨年度の研究テーマである「考える楽しさを実感できる授業づくり」の双方の観点から振り返っていく。1、2学期の授業において、特に意識して行ったことは、大きく分けて2点ある。以下に、具体的授業実践内容を挙げながら省察していく。

授業実践を述べていく前に、「能動的」の定義について今一度確認をする。まず辞書に載っている「能動的」の意味では、〈自らはたらきかけ、他に影響を与えるさま。〉とあり、対して〈自らは動かず外部からの影響を受けるさま〉を「受動的」と定義されていた。能動的の類義語としては、「積極的」や「自発的」などの言葉が挙げられ、このことから「能動的」の意味としては、〈他者からの働きかけではなく、自らの意思で進んで他に働きかけ、行動するさま〉を表すといえるだろう。これを学校現場にも当てはめ、「能動的な学び」として考えた時、自らの主体的な意思（内発的動機）を持って、学習に取り組む姿勢を整えることを指すのではないかと考えた。またその他にも、授業中に扱う教材や課題に対して、受身的な態度で、他人事としてそれらと向き合うのではなく、なぜ自分たちはこの教材に取り組んでいるのか、この課題に取り組むことでどのような力、成果が得られるのか、といった学習の必然性を感じてもらうことでより「能動的な学び」は獲得されていくのではないかと考えた。

1. 生徒同士で学びを深める

今年度は授業実践の中で、生徒が教師の説明を一方的に聞くだけではなく、インプットした知識・情報を生徒自身で積極的にアウトプットさせていくという活動を重点的に行うようにした。高校1年生の国語総合においては、特に一から新しいことを学び、理解し、覚えていくということが必要となってくる。古典における文法や漢文句法などが最たる例だ。そこで、まずは新しい知識として一通り

のことを説明したのちに、必ずペアワークを設け、生徒同士で今習ったことを整理し、お互いに説明し合う時間をとることにした。「分かる」ということは、他者が説明したことを頭の中で理解することだけでなく、それを再び自分の言葉としてかみ砕き、第三者に説明することができることまでを指すと考える。つまりインプットからのアウトプットである。これを生徒が新しい知識を得るたびに行った。国語の授業の目標として、「他者の話・文章を正しく理解し、理解したことを第三者に証明できる力」を獲得することを目標として掲げているため、授業においても常にこの目標を実践することができるように取り組んでいる。このように教師の話の聞き続けるだけではなく、生徒同士が活発的に話す機会を取り入れることで、生徒の顔にも生き生きとした表情や、新たに手に入れた知識を自分の言葉として再度相手に発信するよう一生懸命励む姿が見られた。50分という限られた授業時間の中、生徒が自身の言葉で話す時間を意識的に作ることで、思考を止めることなく、継続的に働かせ続けることもねらいとして行っている。

またペアワークの時間を作ることで、教師からの説明を受けて、個人では理解が不十分であった点も、ペアの人に補足説明を受けることができるというメリットが生まれる。全体の中では、質問がしにくいことも、ペアであれば気軽に聞くことができるだろう。普段の授業から、相互に説明し合うという習慣を身につけておけば、最初は教師の説明を聞くだけといった受動的な姿勢も徐々に改善されていくのではないかと考える。

2. テキストを用いて思考を深める

昨年度の授業実践の中で得られた学びの一つとして、「テキスト自体を読解することを目的として読むのではなく、あくまでも思考を深めるための手段として用いていく」ということが挙げられる。その教材における筆者の主張を読み取る読解力や、要旨・要約をまとめる文章力・問いを考え、自らの言葉で説明をする思考力・判断力・表現力など、テキストを手段として用いることで、多種多様な力を育成していくことができる。今回は、具体的実践内容として、1学期中に扱った「羅生門」という小説の単元を取り上げる。

「羅生門」は、生徒が高校に入り、初めて扱う小説教材となっている。小説の構造や内容を読み解くためのポイントなど、読解方略における手法について学習したのちに、理解した内容を一つの論文として形にすることを最終的な活動内容として授業実践を行った。私が昨年度一年間を通じて学んだことの一つに、〈生徒に学びの必然性を実感してもらう〉ことの重要性が挙げられる。授業に対して受身にならず、主体的に、能動的に学習に取り組んでもらうためには、その活動を行うことでどのような学習効果、力が得られるのか、ということを教員側が明確に示す必要があるのだ。学びの必然性があるからこそ、生徒は意欲をもって能動的に授業に取り組む姿勢を整えることができるのだと考える。そこで本単元においても、まずはどうして学校において小説を学ぶのか、小説を読むのか、小説を学ぶことでどのような効果があり、どんな力を身につけることができると思うか、など生徒が小説を学ぶ必然性を感じることができるように根本的なところから焦点を当てることにした。導入として、小説に関するさまざまな質問を投げかけたのちに、先ほど述べた問いに個人個人で答えてもらった。右記にあるのが、一クラス分の一人ひとりの意見・考えをまとめたものとなっている。

1-2「羅生門」なぜ小説を学ぶのか？

読解の難しさに、よき質問を多くつけるため。	小説より詳しく、読者の感情を共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	いろいろな人の考えや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。
さまざまな視点から読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	小説より詳しく、読者の感情を共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。
いろいろな人の考えや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。
読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。
読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。
読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。
読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。
読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。
読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。
読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。	読者の感情の動きや行動を詳しく、読者の感情や行動の動きを共有するため。

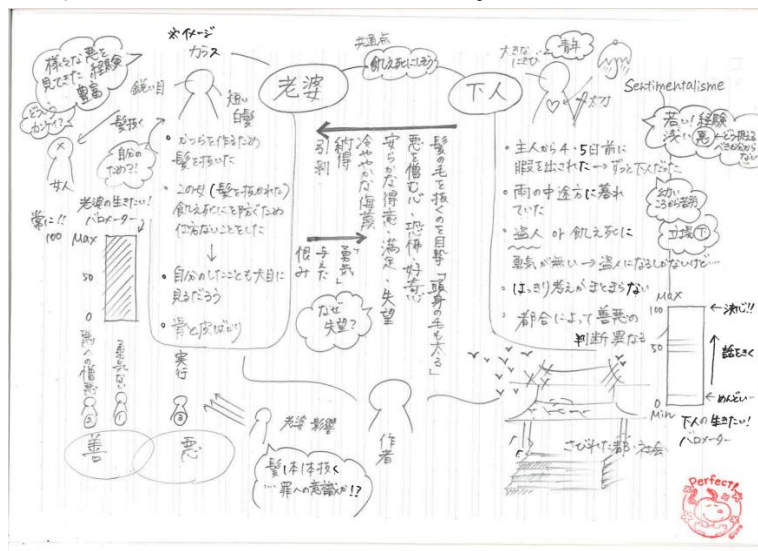
いくつかの意見を抜粋してみると、

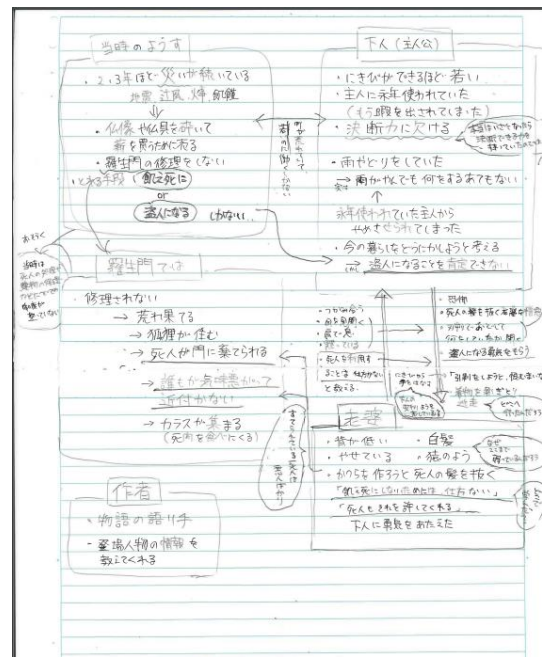
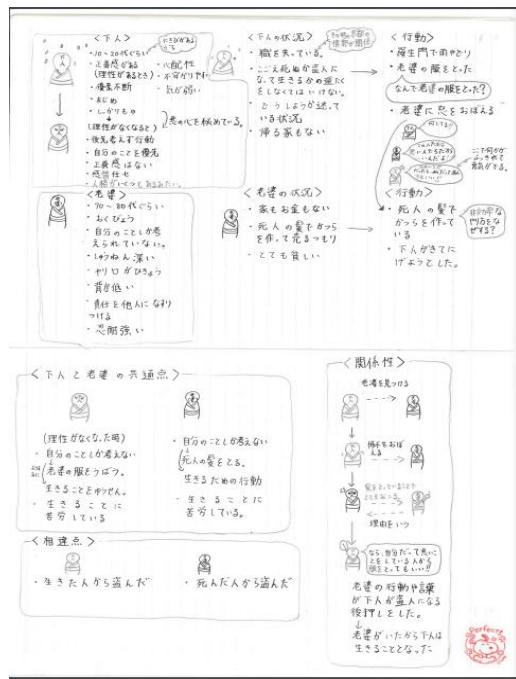
『さまざまな物語に触れて登場人物の心情について考え、新しい価値観・考え方を身につけるため。』
『新たな価値観を学び、そこから自分の価値観を確立するため。他者の気持ちを想像できるようになり、人生をより豊かに生きていくため。』などという意見が見られた。まずは、自分たちで考えた意見・考えをお互いにシェアすることで、小説を学ぶ意義・目的を自分たちなりに確立することができたように感じられる。これにより、ますます小説という単元を学ぶ意味を見つけることができ、能動的な学びの獲得につながったのではないかと考える。今回の活動のように、他の単元においても導入という形で生徒の興味関心をひきつつ、思考を揺さぶるような発問をしたうえで、まずは学習の必然性を感じてもらおうということをお願いしていきたい。

授業全体の流れとしては、「羅生門」という作品を読んでいく中で感じた疑問を取り上げ、自分で決めた「問い」について仮説をたて、本文から論拠をあげて検証し、説得力のある結論を作っていく、というものだ。この一連の流れを論文としてまとめることが、「羅生門」におけるメインの活動となる。教員側から与えられた問いについて考えていくのではなく、自らが感じた疑問や不明点を「問い」として掲げることで活動に対する主体性が生まれ、その「問い」の解決を図ることで文章を細部までより深く読み込むことにつながる。その過程の中で論理的思考力が鍛えられ、自らの言葉としてまとめることで文章力を培うことも期待されるのだ。このような自分自身で問題を設定し、その問題の解決に向けて主体的に物事と向き合っていくといった探究的な活動を国語においても取り入れていくことで、読解力や思考力、文章力や表現力など、すべての教科に通じる基盤となる力を身につけることができると考える。

授業の導入としては、先ほども述べたように「どうして学校で小説を学ぶのか」「小説をよりよく読むためには」といった生徒自身の考えに拠る発問を投げかけた上で、小説を読んでいくポイントの説明から入った。小説においては、最も重要とされるのが登場人物の心情を読みとることである。現代文の小説においても、古典作品においても、物語のあらすじを理解し、心情を読み取っていくためには、登場人物には誰がいて、誰が誰に何をどのようにしたのか、などの舞台の設定を整理することと、また登場人物がどのような性格・特徴を備えた人物像なのか、といったことを把握していく必要がある。その際に、キャラクターマップというものを作成することが有効的な学習方法とされている。高校の作品にまだ慣れていない1年生にとっては、文章を読んでいく中で、分かった情報をマップ形式にしながら整理していく作業が効果的なのだ。生徒は文章中に書かれている表現や描写に基づいてキャラマップを完成させていった。レイアウト自体も個人に委ねることで、それぞれが思い描くマップと仕上がり、本文中にある比喻表現や情景描写など、一つ一つに込められた作者の意図をくみ取り、自分なりに作品について考えていくことができたと感じる。

【キャラマップ】





授業の締めとしては、一人ひとりがグーグルドキュメントに打ち込んだ論文をグループで読み合い、お互いの感想をワークシートに書くとともに、ループブックをもとに相互評価・自己評価を行った。個人それぞれが設定した「問い」について考察していく内容の論文だったため、自分以外の他者がどのような問いのもと、どのような探究結果・考察に行き着いたのか、生徒たちは高い興味関心をもってグループワークに取り組んでいたように感じる。また、お互いに書いたコメントは後程一人ひとり切り取って、本人のもとに渡すような形にしたことで、自分が書いた論文に対する前向きな感想、またこれからさらによりよくしていくためのアドバイスが手元に残るという利点も生じた。自己評価では、再び「なぜ小説を学校で学ぶのか」という問いについて考えてもらったが、初発の意見のときよりも一人ひとりが明確な根拠・自信のもと、それぞれが考える小説の意義・目的について自分の考えを書くことができていた。授業の初期段階では、小説を読むことが苦手、文章を書くことが不得意などの生徒たちは、なかなか単元の活動に対して意欲を持って前向きに取り組むことができなかったが、自ら「問い」を設定し、その問いの解決に向けて、グループワークや論文検索、文献調査などの活動を行って行く中で、少しずつ前のめりな姿勢になっていったと考えられる。国語と探究活動を絡ませて、生徒の自主性を重んじる活動を行うことで、生徒の主体性はより発揮され、能動的な学びを獲得していくことができるのだと強く感じる事ができた授業実践となった。

3. まとめ

今年度の授業実践として、大きく意識したことは2点ある。まず1点目に、積極的にペアワークやグループワーク活動を行い、自己の考えを第三者に表現する場を設けるといことだ。個人で考える時間も確保しつつ、必ず生徒同士でお互いの意見を共有しあう時間を作った。自己の考えを他者に分かりやすく伝えることを意識することはもちろん、自分以外の人の方考え方をすることで多角的な視野を取り入れ、自己の考え方を広げることを狙いとしました。また現代文や古文、漢文と、どの分野においてもただ一問一答形式のクローズドクエスチョンだけではなく、自身の思考力を深めるため、問題文章に対して「あなた」の意見を自由に書くオープンクエスチョンを用意するようにしている。国語という教科の特性の一つとして、答えが一つではない、一つにする必要のない問いというものがあると

考える。オープンクエスションの場合、自身の経験と考え、価値観から紡ぎ出される文章は非常に自由なものであっていいはずだ。これから先、さまざまな場で自分の考えや意見、思いを言葉にして相手に伝えなければならない機会は増えていくだろう。高校3年生になったときの、就職や進学受験における面接などもその一つである。その際に、国語での活動を生かしてもらうためにも、生徒には必ず自分の意見や考えを伝える時には、そう思った理由と根拠をセットで述べるように指導している。論理的な思考力を培い、理解したことを自身の言葉として再度かみ砕き、明快に自分の意見を相手に説明するという活動を今後も積極的に行っていきたいと考える。

そして2点目に、視覚的理解を促すことと効率的な授業の展開を目指してパワーポイントを用いるようにした。データとして授業の内容を残しておくことで、家庭においても Google Classroom などの媒体を通して、授業での要点を振り返ることができるというメリットももつ。実際に生徒からもテスト前の復習に活用している、今後も継続して載せてほしいとの声が上がった。そして評論文の読解方略や、古典文法など、最初に教師からの知識の伝授が必要な際には、手軽かつ明瞭に学習内容を共有することができている。また、確実に知識として覚えなければいけないことは、楽しく、かつ面白く知識を定着してもらうために、スライドを用いてクイズ形式で問題を出すようにした。何回も反復して、声に出して確認し合うことで、少しずつ知っている知識から、使える知識に変化していくことが期待される。

3学期以降の授業においては、上記でも述べたように、まずは知っているレベルの知識として覚えたことを、作品の中で実践的に活用していくことをねらいとして取り組んでいく。また基礎的な知識の習得だけでなく、今後様々な場で応用し活かすことができる読解力や思考力、表現力などの実践的な力も引き続き鍛えていきたいと考える。また生徒の実態に合わせた授業も行っていきたい。全体で教師と一緒に考えていくのか、まずは生徒個人でじっくりと思考を深めさせるのか、クラスの特徴に合わせて柔軟に展開していくことが求められるだろう。そして毎回の授業を単発で考えていくのではなく、前後の授業と関連づけながら、生徒に身につけさせたい力を明確に示して、授業づくりを行っていきたい。